



「お話の向こう側に子どもたちの姿が見えてきた時」。

たとえば、絵本『ハゲタイム』（パトリック・マクドネル）の授業づくり。木澤さんは、ねこのジュールが旅に出て世界中のいろんなものをハゲして（抱きしめて）いく様子と、子どもたちが学校で世界を広げ、いろんな経験をしながら出会った人やできごとが好きになっていく姿が重なって見えた、といいます。小さな絵本ではみんなで読みにくいので、大きな紙芝居にし、みんなで楽しんで、子

どもたち一人ひとりに「ハゲしているか？」ときいてハゲしていきます。

一つの場面に集中しにくい子ども、緊張がとて強い子ども、逆に低緊張の子もいますが、一人ひとりがお話を味わえるように、授業中の関わりを何度も見直していきます。

低緊張で、快・不快の世界に閉じこもりがちだと思われていたセイちゃん。「ハゲ・ハゲ・ハゲ」とハゲされたあと、にっこりして、見つめてくれた時の感動を、木澤さんは忘れることができない、といいます。学校は、その子たちにぴったりのすてきな文化、すてきな人と出会う場所、そのために欠かせないものとして、絵本があります。

どんなクラスでも重要なことですが、重症児クラスで特に大事な目標として、楽しさを味わったり、共感したりすることがあります。これは教育学で情意目標と言います。ところが近年、誰でもわかる行動目標に変えるように、と言われることがあります。もし「話している教師を〇秒見る」というような行動目標で授業を考えていたら、セイちゃんの「にっこり」は生まれなかったのではないのでしょうか。「楽しさ」を教育で実現したい

目標として位置づけていく必要があります。

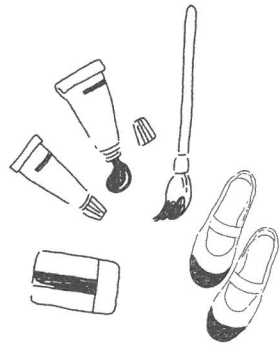
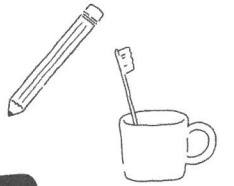
この時期、この子たちの集団で、この先生たちとの教材

木澤さんは、「子どもたちが喜ぶおすすめの教材（題材）を教えてください」と質問されることがありますが、いつでもどこでも誰とでも、ということがあるわけではないと思います。「この時期（学年、季節など）、この子たちの集団で、この先生たちと……」という過去形で語ることはできるのだけれど、と。

木澤さんのこのことは、とても大事です。というのも、今、学校では、「いつでもどこでも一人でも」学べるといわれるオンライン教材、タブレット端末に注目が集まっているからです。木澤さんのように「そういうものはないですよ」と言っていないと、「コレでみんな学べるかもしれない」という錯覚に陥ってしまいます。

先生自身が教材を探して、つくって……としていくことは、手間がかかりますが、でもそれは「この教材と、子どもたちはどんなふうに出会うだろう」「どんなふう学びが展開していくだろう……」

# ねがい ひろがる 教育実践



神戸大学  
川地亜弥子

かわじ あやこ／研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？—発達保障からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

## 第2回 一人ひとりの姿、思いを深く想像して

せんせいの仕事ってなに?

4月号で取り上げた京都の小学校の小松伸二さん。初めて小学校1年生を担当した時に、こう聞かれたそうです。

「せんせいのかいしゃはどこ？」

子どもたちと毎日遊んでいた小松さん。子どもはまさか「自分たちと遊ぶ」ことがしごとなんて思わなかったのでしょうか……。でも、子どもだからそう思った、のでしょうか？ 私たちも、「むずかしい顔をしながら、パソコンに向かったり、ムツカシイ話をしたり、うまくいかずため息ついて愚痴をこぼしたりする」方が「しごとらしい」と思っていないでしょうか。

学校で教えることに限らず、人の発達にかかわるしごとは、「人間を大切にするしごと」（三木裕和さんの著書のタイトル）でなくてはならないし、「人類を代表してその人を愛する専門性」が求められます。パソコンではなく人に向かって笑顔で楽しくなる話をして、一緒にいる人がこれから起きることをワクワクしながら期待するような、そんなすてきなしごとが、「せんせいのしごと」です。

### お話の向こうに子どもたちの姿が見える

滋賀の特別支援学校の木澤愛子さん。重症児クラスの担任を長くしてきました。木澤さんは、クラスの子どもたち、一人ひとりを思い浮かべて授業を考えます。普段のちょっとした様子、引き継ぎの資料、保護者との話や連絡帳のやりとり……。「どんな気持ち？」「どんなことを伝えるといいのかな？」ということが、いつも心の片隅にあるといいます。

木澤さんは絵本がだいすき。授業で使う「これだ！」という絵本との出会いは「突然やってくる」そうです。それは、「お話の向こう側に子どもたちの姿が見えてきた時」。

たたとえば、絵本『ハゲタイム』（パトリック・マクドネル）の授業づくり。木澤さんは、ねこのジュールが旅に出て世界中のいろんなものをハゲして（抱きしめて）いく様子と、子どもたちが学校で世界を広げ、いろんな経験をしながら出会った人やできごとが好きになっていく姿が重なって見えた、といいます。小さな絵本ではみんなで読みにくいので、大きな紙芝居にし、みんなで楽しんで、子

どもたち一人ひとりに「ハゲしているか？」ときいてハゲしていきます。

一つの場面に集中しにくい子ども、緊張がとて強い子ども、逆に低緊張の子もいますが、一人ひとりがお話を味わえるように、授業中の関わりを何度も見直していきます。

低緊張で、快・不快の世界に閉じこもりがちだと思われていたセイちゃん。「ハゲ・ハゲ・ハゲ」とハゲされたあと、にっこりして、見つめてくれた時の感動を、木澤さんは忘れることができない、といいます。学校は、その子たちにぴったりのすてきな文化、すてきな人と出会う場所、そのために欠かせないものとして、絵本があります。

どんなクラスでも重要なことですが、重症児クラスで特に大事な目標として、楽しさを味わったり、共感したりすることがあります。これは教育学で情意目標と言います。ところが近年、誰でもわかる行動目標に変えるように、と言われることがあります。もし「話している教師を〇秒見る」というような行動目標で授業を考えていたら、セイちゃんの「にっこり」は生まれなかったのではないのでしょうか。「楽しさ」を教育で実現したい